

緊急取材 東日本大震災

生まれ育った土地に帰りたい!

南相馬市から東吾妻町へ避難した人たちに聞く

3月11日に起きた巨大地震は想像を絶する規模の津波を引き起こし、さらには東京電力福島第一原子力発電所に再起不能の打撃を与えた。そして目に見えぬ放射能のために原発近くの住民は故郷を離れ、見知らぬ地での避難生活を余儀なくされた。群馬県東吾妻町にあるリゾートホテル「コニファーいわびつ」と東吾妻町営「岩櫃城温泉」には南相馬市の住民約300人が避難している。南相馬市南部小高区一帯は福島第一原発の20km圏内に、原町区は30km圏内に位置する。コニファーいわびつと中之条高校を訪ねた。

コニファー(針葉樹)いわびつ

岩櫃山のふところにある「コニファーいわびつ」は東京都杉並区保有の宿泊施設。東吾妻町は杉並区と友好交流都市であり、そしてまた杉並区は南相馬市と災害相互援助協定を結んでいる。このような3つの自治体の交流関係が、被災者の受け入れに繋がった。

優れた自治能力

ここで避難生活を送っているのは約210人。リーダー6人とサブリーダー6人からなる自治組織が機能し、円滑な避難生活が送られているという。食事の支度や施設の清掃などは、避難者が当番でおこなっている。訪問時は昼食の準備中で、女性5、6人で配膳をしていた。メインメニューは親子丼。高齢者には、お粥が用意されていた。



避難所から通学する子どもたち

就学児童生徒は、「コニファーいわびつ」と「岩櫃城温泉」にいる子どもを合わせると30人程。小学生11名、中学生9名はそれぞれ、原町小、中学校に編入した。高校生は5、6人。避難生活が長引くことが明確になった今、避難地区にある高校に編入する決断をした生徒もいる。

病院行きバスが運行されている

避難者は高齢者が多く、持病のために通院が必要な人も少なくない。そこで、毎日病院へのバスが出ている。また杉並区から派遣された保健師や、南相馬市からの看護師が常駐して体調管理に配慮している。

福村支配人に聞く

支配人の福村さんは地元出身。避難民を受け入れて1カ月がたった。今のところ気が張り詰めているので疲れを感じないと言う。



『大きな混乱はありませんが本来の収容人

数を大幅にオーバーしているのでご不便をかけています。インフルエンザの発生や地震直後の燃料不足では苦労しました。支援物資は豊富に支給されていますがトイレットペーパーは不足しています。各種慰問が訪れてみなさんを楽しませてくれています。』

バスに揺られて県外避難

南相馬市小高地区に住む建設業の男性・本間さんと、70歳代の女性・松本さんに聞いた。地震発生時、ひどい横揺れが長時間続いた。自宅は海岸から約5キロ。揺れがおさまると、津波に警戒し高台に避難した。津波警報が解除されてその晩は自宅に戻ったが翌日、原発事故による避難指示を受けて原町地区の避難所へ移った。

3月16日の夜、はっきりとした行く先もわからないまま新たな避難先に向けてバスに乗り込んだ。途中、検査員が乗り込んできて全員の放射線被ばく量を測定した。このバスは、東吾妻町長が南相馬市長からの要請を受け、被災者を迎えに行ったもの。不安を乗せたバスがコニファーいわびつに到着したのは翌朝の9時に近かった。

帰りたい

2人とも、「毎日ご飯が食べられお風呂にも入れるのでありがたい。群馬のみなさんに感謝しています。」と語った。終始、笑顔を絶やさなかった本間さんが、「帰りたいですか？」の質問に声を詰まらせ、「帰りたいですよ。せめて自宅があった近くの地域に住みたい。生まれ育った土地だから。」とつぶやいた。



中之条高校では

東吾妻町の東隣、中之条町にある中之条高校に5人の避難民が転校してきた。そのうち

の2人（岩櫃城温泉滞在）から話を聞いた。

南相馬市原町区からきた木幡成貴さん（普通科2年）と森本和典さん（生物生産科1年）だ。2人はそれぞれ海岸から離れた自宅と中心街で地震に遭い、津波の難を免れた。海岸近くに住む森本さん宅は跡形もなく流され祖母が犠牲になった。2人とも両親と別れての避難生活だが、表情に暗さが見えない。

見知らぬ土地での学校生活は？



木幡さんは相馬東高校2年に進級したら情報科で学ぶはずだった。中之条高校では普通科に編入。初対面の級友たちと仲良くなるために自分から話しかけたという。早速、自分と同じ趣味を持つ友達を見つけた。3年生から筆箱、筆記用具など贈られて感激したとも。市職員である両親は現地で被災者支援に従事。前向きな姿勢は両親に負けないようだ。



森本さんは相馬農業高校に進学することがきまっていた。木幡さんとはいとも同士。心強い存在が一緒にいるとはいえ、環境の急激な変化に戸惑いがあるはず。しかし森本さんは「僕も初対面だけれど他の人も高校で初めて会う人。みな条件は同じ。」と言って私たちの心配を一蹴した。15歳とは思えない。取材の最後に見せたいたずらっぽい笑顔が彼の素顔とみた。

取材を終えて

避難生活を送るみなさんの落ち着いた表情に私たちが勇気づけられました。一日も早く穏やかな生活を取り戻されることを祈ります。

取材に応じてくださった方々、コニファーいわびつや中之条高校のみなさん、東吾妻町役場のみなさんにお礼を申し上げます。

（取材・文責：倉林、下田）